

地方の会報紙より

今回は、各都道府県の会報紙に掲載された会長の挨拶等の中で、全国の会員の方々にも読んでいただきたいと思われ論文を転載いたしました。これからも、この企画を継続する予定です。

一宿一飯の恩義

千葉県退職校長会

会長 西村 堯

(千葉県退職校長会会報第67号)

宗教学者山折哲雄氏が、新潮社「波」誌の今年の一月号から「長谷川伸と日本人」という魅力溢れる「日本人論」を展開している。二月号の第二回は、「沓掛時次郎と一宿一飯」というタイトルであった。

六十歳代の会員の皆様には、長谷川伸などという大衆小説作家は、なじみが薄いかもし

れない。「一本刀土俵入り」「験の母」などの作者である。

さて、「一宿一飯」というタイトルで、私は、ある先輩に「西村さん、世の中、一宿一飯の恩義を忘れるなよ」とよく言われたことを思い出した。懐かしい言葉だ。もつとも、この先輩が、時々、飲み屋に誘うときの殺し文句としてこの言葉を使うのには、やや困惑したのであるが。

先輩の言うのには、人は皆、多くの人たちのお世話になって今日があるのだ。その恩義を忘れるなよということである。

私は、地縁も血縁も何もない土地で教員としての第一歩を踏み出したのであり、本当に多くの方々にお世話になった。しかし、若い時はそれに気づかず、随分不義理なことをしてきた。今省みて、冷汗三斗の思いである。

ところで、退職校長会は、親睦団体である。確かに全国連合退職校長会の立派な「綱

領」もあるが、それは目標であって、実態としては、「一宿一飯の恩義」「義理と人情」の世界ではないのか。「一宿一飯の恩義」など前近代的な任侠・やくざ社会の話だと冷笑、切り捨てることもできる。しかし、私には、何か日本人の精神性の深い所を流れる大切な血流のようにも思えるのである。

地域や学校に

認められる団体に

鳥取県退職校長会

会長 徳永 耕一

(積雲第67号)

(前略)

昭和六十一年第一回総会が開催され本年で二十五年を迎えます。この間、日夜奔走された諸先輩方のご尽力に感謝の念で一杯です。

私たちの命は遠く先祖から始まり今に繋がっています。そして、隣人・自然・風土の

恩恵に浴しています。これらに感謝し素直にその幸を見つめる謙虚な態度は大切なことと思います。この「感謝する心」「謙虚な態度」を退職校長会の実践活動に生かしたいと思えます。

現職時代、学校経営は決して一人でできたものではありません。多くの仲間、地域の皆さんの協力に助けられたのです。この感謝の気持ち忘れられることなく、恩返しをする時だと思えます。また、過去の肩書にこだわることなく、謙虚な態度で地域の人々や学校へのお手伝いをするべきだと思います。活動し行動する退職校長会でありたいものです。

子どもたちの挨拶

子どもたちの声

中高支会 小林 弘

(長野県退職校長会会報第101号)

退職して、早くも二年目に入った。子どもたちの活き活

きとした姿と接していた毎日から遠のいたことに、やや寂しさを感じていた昨年八月、母校の小学校から、十月より週一で五・六年生の英語活動に係わってほしいという依頼があった。地元の子どもたちのことでもあり非常勤の勤務もあつたが時間のやりくりがつくので快諾した。

英語初期の学習は「苦手意識をつくらず」「楽しい、早く中学校でやりたいな」と今後につなげる重要な段階だけに、教材研究や担任の先生との授業の打ち合わせが楽しみの一つになった。さらに教室で子どもたちの輝く笑顔に接することができたのは、至極の喜びであつた。

さて、私は祝祭日や勤務のない日の夕方、時間が許すかぎり妻と一緒にウォーキングをやっているが、この母校の前を通るのがコースの一部である。冬は丁度通る時間帯が子どもたちの下校時間と重なっていたため、雪山で遊んで

いたり、かたまつて楽しそうに話している子どもたちともよく顔を合わせた。英語学習に係わらせてもらっていたおかげで、子どもたちとも顔見知りとなり、「こんにちは」と声をかけると、寒さ対策のために私がマスクをしていたので誰だか分からず、最初は「あれっ！」とびっくりしていた。しかし、私だということとが分かってくると、明るいつれづれが毎回返ってくるようになった。

その小学校も統合のためこの三月に閉校となり、四月には新たな学校として開校した。今年に入り同じコースを通じていて変わったことは、子どもたちの声が聞こえなくなつたことだ。寂しい気がしたが、致し方ない。今度は少し学校が遠くなるので子どもたちが登下校の際安全に十分注意して元気に通ってくれたらと願わずにはいられなかつた。

今年の五月、ウォーキング

の終盤、ある家の庭先から中学生らしき男子五人ほどが出てきた。そのうちの一人が私たちに向かつて「こんにちは」と声をかけた。他の男子もすぐ「こんにちは」と続けた。すかさず、私も返事を返した。

その後、「おい、お前、知っている人か」「いや、知らないよ。でもいいじゃん、挨拶したつて」と話しているのが背後から聞こえてきた。いい心がけの生徒たちだ、と感心しながらウォーキングを続けた。

私も、ウォーキングの途中、知らない人にも必ず「こんにちは」と声がけすることにしているが、この中学生たちのように互いに交わす挨拶、少し距離があれば会釈だけでもいい、子どもたちとともに感じのいい地域気持ちのいい地域づくりにしていきたいものだと思っている。